

巻頭言

人間関係

繁多 進

最近の子どもは人間関係の持ち方が下手になっているとよく言われる。たしかにその通りだと思う。問題は どうしてそのようなことになってきたのかということである。人間の赤ちゃんは誰もが他者との関わりを持つとうとする本能をもって誕生すると考えられている。自分自身の力で自分の生命を維持できない赤ちゃんは周りの人々との関わりを通して自らの生命の安全を維持していく。

もちろん、主として関わるのは母親であり、父親である。生後六ヶ月か七ヶ月にもなれ



ば、それまでの相互作用の経験を通して、まず、それまでに最も関わってきた人に対して、「この人が自分の保護に一番責任をもっている人だ」「この人といれば自分の生命は大丈夫だ」「この人といつも一緒にいたいな」「この人大好きだな」という特別の感情をいだくようになる。赤ちゃんが初めて愛情と信頼という感情を具体的な対象に向けたというこゝとであり、愛着と呼ばれる心の絆の形成である。最初の愛着の対象が多くの場合母親になるのは、それだけ母親が関わってきたからにはかならない。

母親を愛着の対象にした赤ちゃんは、やがて父親に対しても「この人も母親と同じように自分を守ってくれる人だ」と思うようになり、このようにして祖父母も、きょうだいも、仲間も、近隣の人々や親戚の人々も愛着の対象としていくというのが普通の発達である。

このようにして順調に人間関係を深め、広げてきた子どもたちが、将来、円滑な人間関係を営めないために人間社会に適応できなくなるというようなことは考えにくい。人間関係能力とは「人を愛する能力」であり、「人を信頼する能力」と言い換えてもよいものであろう。両親をはじめとして、多くの人々を愛と信頼の対象にしている子どもたちは、人間関係能力を十分に備えた子どもたちにはちがいないからである。

そうであるとするならば、円滑な人間関係を営めず、人間関係でつまづく子どもたちは、両親への愛着を形成する過程か、あるいは、愛着の対象の輪を多くの人々に広げてい

く過程のどちらかで問題があった子どもたちということになる。

育児情報が氾濫し、「早期教育だ」「右脳だ左脳だ」「赤ちゃんのときから外国語を」と叫ばれ、「離乳食はこのように」とこと細かなマニュアルを示されると、そっちの方に頭が向いてしまって、赤ちゃんにとって最も重要な課題は「両親を大好きになること」ということを忘れてしまい、両親への愛着を形成する過程に問題をもたらすということがあるのかもしれない。

両親への愛着を土台にして、愛着の対象を広げていくときにも、今日の社会は大きな問題を抱えている。核家族が孤立化していて、子どもたちは他の人々と関わる機会を極端に制限されている。少子化は家族内の人間関係や親族関係を縮小化し、地域社会の崩壊は近隣関係を浅薄化している。昔の子どもたちと違って、今日の子どもたちはごく自然のうち

に多様な人間関係を経験するというような状況にはおかれていないのである。

すべての親が、まずは子どもから好かれ、信頼されることに専念し、そして多くの大人が、自分の子ども以外にも、周りの子どもたちのせめて一人からでも「大好きなおばちゃん」「大好きなおじちゃん」と思われたいと願うならば、人間関係が苦手な子どもなどいなくなるのではないかと思うのだが……。これは夢物語であろうか。

(白百合女子大学)